

覚書：セバスチャン・メルモスの翻訳活動¹⁾

堀 江 珠 喜

オスカー・ワイルドは1898年から1900年に没するまでのパリ滞在中に、翻訳の仕事が続けていたといわれている。つまり文学作品の英訳業に、たずさわっていたらしいのである。彼はこの時期、セバスチャン・メルモス (Sebastian Melmoth) の偽名を、日常生活と執筆活動の両方において用いていた。これは殉教者セバスチャンと、ワイルドの大伯父による小説『放浪者メルモス』 (*Melmoth the Wanderer*) から取ったもので、本名が他人に与えるショックを予想した結果である。このように偽名で実体を隠そうとした生活においては、その行動も明らかではない部分が多い。従って当時の彼の翻訳活動についても、これを事実と断言するまでに、いま少し検討の必要があることは否めない。

というのも少なくともこれまでに公表されている手紙の中で、ワイルドがこの仕事について語っている箇所は皆無である。また書誌、及びワイルド研究の多くは、この事柄には触れていない。そのため真偽のほども疑わしいわけであるが、これまでのところワイルド訳とされているのは次の二作である。

まず可能性の薄い方から挙げるならば、ペトロニウス (Gaius Petronius Arbiter) の『サティリコン』 (*The Satyricon*) である。平井博はその書誌の中にワイルド訳とされるこれ——(New York: Book Collectors Association, 1934) 版——を加えてはいる。²⁾が、その真偽については「これを証拠立てるものは何もない」と述べているのである。確かにこの版の表紙には “Translation Ascribed to Oscar Wilde” と記されているが、「序」は作者の紹介のみで、翻訳者については一言も触れていない。ワイルドがどのよ

うな状況にあって、いつ頃この仕事を行ったかなど、知る由もないのである。

ところが他にもセバスチャン・メルモス、あるいはオスカー・ワイルド訳として『サティリコン』を、1909年以前にパリのシャルル・カーリントン (Charles Carrington) が出版した事実は認められる。メイスン (Stuart Mason) の書誌によれば、この出版社は1901年から『ドリアン・グレイの肖像』 (*The Picture of Dorian Gray*) を出している。これはイギリスでは1895年、つまりワイルドの逮捕を機会に、それまでの出版社がこの作品の発行を中止したためである。このような事情から判断すると、カーリントンは好事家向きの出版社とも考えられよう。

この『ドリアン・グレイの肖像』の1909年版には、本文と最後の余白の頁のあいだに色付きの紙がはさまれ、青字で興味深い事柄を通知していた。セバスチャン・メルモス、あるいはオスカー・ワイルドによる『サティリコン』と『死せざるもの』 (*What Never Dies*, 仏題 *Ce qui ne meurt pas*) の訳書の出版を打ち切ったことが記されていたのである。

...the publisher no longer offers translations of *The Satyricon* of Petronius and *What Never Dies*, from the French of Barbey d'Aureville, as being the work of "Sebastian Melmoth" or Oscar Wilde³.

当然ながら上記のような出版停止を表す語句は、以前にメルモス (ワイルド) 訳として出していたことの逆接的な証明になる。もし『サティリコン』を実際にワイルドが翻訳したのであれば、その意図は何だったのか。あくまで仮定の上に立つ推測ではあるが、これがホモセクシュアリティを謳歌した放浪記であるという内容にも、関係がありそうだ。

さらにペトロニウスは、ボードレールをはじめ⁴、19世紀後期の悪魔主義的作家達が好んだ作家のひとりであった⁵。この傾向は世紀末デカダンの聖書ともいわれる『さかしま』 (*A Rebours*) においても表れる。主人公のデ・ゼッサント (*Des Esseintes*) は、ラテン文学においてペトロニウスを最も

高く評価し、『サティリコン』を味わう。

L' auteur qu' il aimait vraiment et qui lui faisait reléguer pour jamais hors de ses lectures les retentissantes adresses de Lucain, c' était Pétrone.

Celui-là était un observateur perspicace, un délicat analyste, un merveilleux peintre; tranquillement, sans parti pris, sans haine, il décrivait la vie journalière de Rome, racontait dans les alertes petits chapitres du *Satyricon* les moeurs de son époque.⁶⁾

『ドリアン・グレイの肖像』第11章は、この『さかしま』の影響下に暮らす主人公を描いている。ドリアンにとってデ・ゼッサントは、自分自身にさえ思われた。デ・ゼッサント張りの宝石、香水、美術品への異常な執着がそれを裏付けている。

そこでデ・ゼッサントが称賛した『サティリコン』をドリアンがまた愛読したとしても、何の不思議もあるまい。ただしドリアンはこの作者の方に興味を持っていたようで、ペトロニウスの現代版となるかもしれないなどと考えて楽しむのである。

For, while he was but too ready to accept the position that was almost immediately offered to him on his coming of age, and found, indeed, a subtle pleasure in the thought that he might really become to the London of his own day what to imperial Neronian Rome the author of the *Satyricon* once had been, ...⁷⁾

タキトゥス(Cornelius Tacitus)の『年代記』(*Annales*)は、ペトロニウスを“arbiter elegantiae”つまり「粋の判定家」と記している。そのため、この作家についてはふつう“Petronius Arbiter”と呼ぶ。

それにしても「粹の判定家」といわれるほど、ダンディにとって名誉な称号はあるだろうか。ドリアンが、そしてワイルドが、この帝政ローマ期のダンディに憧れるのは当然の心情であろう。しかもタキトゥスによれば、ペトロニウスの生活ぶりは、世紀末デカダン達の先祖に相応しいものであった。

〔ガイウス・〕ペトロニウスについては、生前までさかのぼってもう少し眺めてみたい。なにしろ昼日なか眠って、夜を仕事と享楽に生きた人であるから。他の者なら、さしずめ精励恪勤によるところを、この人は無精でもって有名となった。資産を食いつぶした人によく見かけるような、大食漢とか放蕩者としてではなく、贅沢の通人として世に聞えていた。彼の言うことなすことは、世間の因襲にとらわれず、なんとなく無頓着に見える場合が多かっただけに、いっそう快く、天真爛漫な態度として受けとられた⁸⁾。

従ってワイルドが『サティリコン』を翻訳する動機はないわけではない。人気の高い作品でもある。しかしすでによく知られた古典である上に、翻訳も手回っていたようだ。ワイルド自身も次のように述べている。

I should fancy that the most ordinary of scholars is perfectly well acquainted with the *Lives of the Caesars* and with the *Satyricon*. . . . as for the *Satyricon*, it is popular even among passmen, though I suppose they are obliged to read it in translations.⁹⁾

確かに大学時代はラテン語が得意であったとはいえ、その専門家でもない彼にこの翻訳の仕事が可能であろうか。もちろんフランス語から翻訳する方法もあるが、すでに英語版が存在している以上、文学的には意味のある作業とも思えない。ただワイルド訳という看板は、大いに好事家達を魅了したことであろう。

さてデ・ゼッサントは近代文学にも興味を示すが、彼の心をとらえた作家のひとりがバルベール・ドールヴィイ (Jules Barbey D'Aureville) であった。先の引用からもわかるように、彼はワイルドが訳したといわれるもうひとつの作品『死せざるもの』の作者である。

この作品も『サティリコン』と同様に、まだワイルドの翻訳と断言するべきではないかもしれない。が、その可能性は『サティリコン』よりも大きい。というのも現在リプリントで手に入るサンフラワー版 (Sunflower Edition) のワイルド全集第13巻に、彼が訳したものとして収められているのである。ワイルド研究においては、決してこの版が最も権威ある全集ではない。が、そこに収録ということで、ひとまずワイルド訳と認められたかたちになっている。

またワイルド訳の初版は、フランスで刊行された1902年の500部限定私版 (Privately Printed) であると考えられる。この表紙の裏には“Edition limited to five hundred copies for private circulation only, amongst friends and subscribers”¹⁰⁾ という断わりがある。しかも翻訳者名は“Sebastian Melmoth (O. W.)” という具合に、アンダーグラウンド的性格を帯びた出版である。しかし平井博は書誌の中で1928年に再版されたものを挙げているから、意外にロングセラーであったことになる。ただしこれらはすべてワイルドの死後の出版であり、この翻訳が彼に利益をもたらしたとは思えない。

それにしても晩年のワイルドが『死せざるもの』という題の作品を翻訳したのは皮肉であり、かつ象徴的でもある。またこの作品が原文で出版されたのも、バルベール・ドールヴィイ自身の晩年の1883年であった。彼は1836年、28才のときに初稿を書いたのだが、内容が不道徳でおぞましいとして、発表を見送らなければならなかったのである¹¹⁾。

バルベール・ドールヴィイにホモセクシュアルの噂がなかったわけではない。が、この物語の不道徳性は次のような重層的な近親相姦にある。

まず物語は、ノルマンディの古城に住む中 づの未亡人イズー (Yseult) に、

17才のアラン(Allan)が恋をしているところから始まる。彼女はこの亡き親友の息子を引き取り、14才の娘カミーヤ(Camilla)と共に育てている。アランは夫人にとって息子か甥のような存在であった。ところが、アランは母親のような夫人を愛する、つまり比喩的な母子相姦の図式が成り立つのである。また夫人は以前、夫の甥と恋仲になったことがあったから、物語の始まる以前から近親相姦の下地が作られていたことになるし、夫の甥と、甥のようなアランのイメージが重ねられもする。

アランとの関係を隠し、娘の関心を外へ向けるため、夫人は二人を連れてイタリアに移り、二年間を社交界で過ごす。が、体調をくずしてノルマンディへ戻る。病気で部屋にこもりがちの夫人にひきかえ、成長した娘の魅力はアランの心をとらえるのに充分だった。ここでは二つの意味で近親相姦が認められる。まずアランとカミーヤは兄妹同然であった。ついでカミーヤは夫人の面影をたたえている、すなわちアランはカミーヤの中に夫人の姿を認めていたという母子相姦の図式が、またもや表れるのである。

ワイルドの作品においても、しばしば近親相姦のモチーフが表れる。例えば『ウインダミア卿夫人の扇』(*Lady Windermere's Fan*)では、夫の愛人だと噂されるのが妻の実母であるし、『サロメ』(*Salomé*)では王が姪にもあたる継子に恋をする。『つまらない女』(*A Woman of No Importance*)では、息子の婚約者にちよっかいを出すイリングワース卿が登場する。このようにワイルドにとって、近親相姦のテーマ自体は特に目新しいものではない。

バルバー・ドールヴィイはこれをもっと生々しい結果に導いた。イズーとカミーヤは母娘そろってアランの子供を生むのである。高齢出産の無理がたたって、イズーはやがて亡くなる。そのいまはのきわに事実を知ったカミーヤは気を失うほど驚くが、結局は自分の娘と母の娘とを育てるのである。これほど深刻な人間関係は、ワイルドが描き得るものではない。おそらくは翻訳という作業を通してのみ、紙上に表すことのできる世界ではなかったか。

カミーヤはアランをまだ愛している。が、その愛情よりも哀れみ(pity)の

情が強くなりつつある。愛がなくなっても、哀れみだけは残るとアランは考える。

Camilla—too jealous Camilla—in spite of the love that she still feels for me, has never once been false to herself. That is because, Albany, pity has at last been born in her; pity, the inheritance of her mother; pity, stronger than the love she has for me, and which perhaps may soon fade; that unalienable pity which, when all sentiment and passion is mowed down in women's hearts, is of all their feelings—WHAT NEVER DIES!¹²⁾

つまり「死せざるもの」とは凡人が想像するような愛ではなく、哀れみのことだったのである。そもそもこの小説につけられた最初の題が『妹』(*Germaine ou La Pitié*)であったように、哀れみの情がこの物語の主旋律をなしている。まさに訳書の序に記された「限りなき哀れみの福音書」¹³⁾という表現が、この作品に相応しいのである。

先にも述べたように、この翻訳がワイルドの大きな収入源になったとは考えられない。サンフラワー版では550頁にわたる長篇であり、この翻訳には多くの時間とエネルギーが費やされたことは間違いがない。ワイルドにこのような根気があったとは信じ難いほどである¹⁴⁾。が、いくら時間とエネルギーを投入しても、内容からして常識的な出版社がとびつくものではない。かといって断じてポルノグラフィではないから、その市場からの要求も見込めまい。この事情はワイルドにもわかっていたはずだ。にもかかわらずこの翻訳を遂行した動機はなんだったのか。ワイルドが華やかな過去に生きる作家であり、未来にもはや何も望んでいなかった¹⁵⁾ということの証なのだろうか。

というよりやはり「哀れみ」のテーマに魅せられたと考えるべきではないか。いうまでもなく哀れみとは、その情をかける対象を必要とするわけだが、かけられる方は悲しみ(*sorrow*)を抱いているのを常とする。そしてこの

「悲しみ」こそ『獄中記』(*De Profundis*)においてワイルドが、最も頻繁に用いた言葉であった。すなわち1895年のカタストロフの後、ワイルドの心情と境遇を最もよく表すのがこの「悲しみ」と「哀れみ」であったと考えられるのである。おそらくこの頃のワイルドは、これらの要素を抜きに創作が出来る状態ではなかったであろう。

しかしながら「悲しみ」や「哀れみ」は、それまでのワイルドが最も否定してきたものであった。というのはワイルドの考えるところのダンディズムと、相入れない要素であったからである。

ダンディズムを語ることは難しい。それはダンディズムが、他者とは異なり卓越している状態に存するので、数多くのダンディ達を単一の言葉でくくろうとする試み自体に無理があるためではないか。従って、ここではあくまでワイルドの場合についていうのであるが、彼のダンディズムは人生の傷に共感することを認めない。これは『ドリアン・グレイの肖像』のヘンリー卿(Lord Henry)や、『つまらない女』のイリングワース卿(Lord Illingworth)の次のような主張にも表れている。

One should sympathise with the colour, the beauty, the joy of life. The less said about life's sores the better.¹⁶⁾

ただしこれはあくまでダンディのポーズのゆえであり、ワイルドの内面と必ずしも一致していたわけではない。そこでダンディズムによって吐露が許されなかった心情は、童話という形をとってつづられることになったのである。例えばヘンリー卿が絶対に共感できないといった「苦しみ」(*suffering*)については、「幸福の王子」("The Happy Prince")では"more marvellous than anything is the suffering of men and of women"¹⁷⁾と述べられている。しかしこれはあくまで「童話」という口実のもとになし得た発言である。

ところがカタストロフを経験したワイルドは、再びイギリスの上流階級を舞台にした華麗なダンディズムを描くことはできなかった。かといって、や

はりダンディたる一面を残した彼は、『獄中記』や『レディング監獄の唄』(*The Ballad of Reading Gaol*)の延長上にあるような「哀れみ」や「悲しみ」の連作を続ける気にもならなかったであろう。しかももちろん、これらを抑えることもできない。このような葛藤にあって、はからずもワイルドはダンディズムとこれらの心情との接点、あるいは融合点を見つけることになった。それが『死せざるもの』である。

この作者バルベール・ドールヴィイは、ダンディの王者ブランメル(*George Bryan Brummell*)の研究者として知られているが、彼自身もフランスにおける代表的なダンディであった。ルイ15世の血をひくともいわれ、ボードレールなどダンディ達とも親交を深めていた。かかるダンディが、死せざるものとして「哀れみ」を語ったという事実は、ワイルドを驚かせたに違いない。そこでここに自己の主義と心情との共有点を見出したワイルドは、翻訳という過程を通してその可能性を会得しようとしたのではないか。

またバルドー・ドールヴィイは過激なカトリック信者としても有名であったが、ワイルドも多くの世紀末芸術家と同様、カトリシズムに惹かれていたことはいうまでもない。特に晩年にはその傾向が強くなり、その点でもバルベール・ドールヴィイに興味を抱いたであろうことが推測できる。

さらに『魔性の女たち』(*Les Diaboliques*)に『閨房哲学』(*La Philosophie dans le boudoir*)のエピソードがみられるように、バルベール・ドールヴィイにおいてはしばしばサド公爵(*Marquis de Sade*)の影響が指摘される。例えば『さかしま』では、バルベール・ドールヴィイが神秘主義とサディズムというカトリックの二つの深淵のあいだを巧みにすり抜けたと理解するのである。デ・ゼッサントがこの作家を好んだのも、ダンディズムとカトリシズムに惹かれたからに他ならない。

ワイルドも『獄中記』の中でサド公爵とジル・ド・レエ(*Gilles de Retz*)に言及し、自らを同等に並べようとするところがある。特にこの箇所の意味を問う研究はないようだが、もしカトリシズムとの関連の上で考えようとするならば、バルベール・ドールヴィイの存在をも考慮すべきであろう。

このようにワイルドの晩年の翻訳活動は、まだほとんど研究の対象になっていない。が、ワイルドのダンディズムやカトリシズムという問題を扱うにあたって、翻訳活動に注目することによって、新しい議論の展開される余地が充分にある。これはワイルド研究の今後の課題の一つに挙げられよう。

註

- (1) これは1985年7月7日、日本ワイルド協会のシンポジウム「ワイルド：1895—1900」において行った発題の原稿を改めたものである。
- (2) 平井博『オスカー・ワイルドの生涯』松柏社、1979、p. 300.
- (3) Stuart Mason, *Bibliography of Oscar Wilde* (1914; rpt. N. Y. Haskell House, 1972), II, p. 350.
- (4) cf. Philip Stephan, *Paul Verlaine and the decadence 1882-90* (Manchester Univ. Press, 1974), p. 23.
- (5) cf. Ian Fletcher and Malcolm Bradbury, *Decadence and the 1890s*, ed. Ian Fletcher (London: Arnold, 1979), p. 7.
- (6) Joris-Karl Huysmans, *A Rebours* (Paris: Union Générale, 1975), pp. 84-85.
- (7) Oscar Wilde, *The Picture of Dorian Gray, Complete Works of Oscar Wilde* (1966; rpt. London; Collins, 1975), p. 104.
- (8) タキトウス『年代記』(下) 国原吉之助訳 岩波文庫、1981、pp. 316-317.
- (9) Oscar Wilde, *The Letters of Oscar Wilde*, ed. Rupert Hart-Davis. (N. Y. Harcourt Brace and World, 1962), p. 258.
- (10) Barbey D'Aurevilly, *What Never Dies*, trans. Sebastian Melmoth (O. W.) (Paris: Privately Printed, 1902), p. 2.
- (11) cf. Charles Baudelaire, *Correspondance* (Paris: Gallimard, 1966), I, p. 305. Barbey D'Aurevilly, *Correspondance Générale III (1851-1853)*, (Paris: Les Belles-Lettres, 1983), pp. 216-217.
- (12) Barbey D'Aurevilly, *What Never Dies*, trans. Sebastian Melmoth (Oscar Wilde), *The Works of Oscar Wilde* (1909; rpt. N. Y; Sunflower Edition, 1980), XIII, pp. 555-556.
- (13) cf. *Ibid.*, p. 3.
- (14) cf. Hesketh Pearson, *The Life of Oscar Wilde* (1960; rpt. Penguin, 1985), p. 149.
- (15) *What Never Dies* (Sunflower), p. 3.
- (16) *Dorian Gray*, p. 44. なお *A Woman of No Importance, Complete Works*,

- p. 437 においてイリングワース卿は同様の発言をする。
- (17) Oscar Wilde "The Happy Prince," *Complete Works*, p.290.